

危うい盛り土 住民自ら点検

広島工業大・森脇教授に聞く

「自宅一帯の盛り土点検も防災の意識を高めるきっかけになる」と話す森脇教授



(林淳一郎)

静岡県熱海市で3日に発生した大規模な土石流は、山あいの不適切な盛り土の崩落で流出した土砂が大半を占めていたという。これを受け、広島県は近く盛り土の点検に乗り出す方針だ。山がちな中国地方は土砂災害の危険が高く、秋口まで豪雨への警戒が続く。どんな盛り土が危ういのか。住民がチェックできるポイントを広島工業大の森脇武夫教授（地盤工学）に聞いた。

タイプとリスク

盛り土は大きく分けて3タイプある。森脇教授によると、谷を土砂で造成する「谷埋め型」と山の斜面に土砂を盛る「腹付け型」は宅地開発に多い。さらに、熱海市のケースのような残土処理がある。「すべての盛り土が危険というわけではない」と森脇教授。「谷埋め型」「腹付け型」の宅地は、広さ3千平方メートル以上などの大規模な盛り土が多い。自治体の規制が入りにくい小規模な盛り土に比べて、排水設備などが整い、安全度が高い。ただ、どんな盛り土も崩壊のリスクが増すのは、排水の溝やパイプにゴミなどが詰まったり、ひび割れが生じたりしたときだ。そもそも、自宅の敷地と周囲が

小規模は実態つかめず

盛り土なのかどうか。大きな団地の場合、自治体ができる「大規模盛り土造成地マップ」で確認できる。「谷埋め型」「腹付け型」の造成エリアを地図上に示し、昨年3月までに全国すべての自治体がホームページ（HP）で公開。中国5県では、広島1282カ所▽山口968カ所▽岡山896カ所▽鳥根705カ所▽鳥取63カ所が示されている。一方、残土処理などの小規模な盛り土は、実態がつかみきれない。広島県内では全3市町村のうち、2千平方メートル未満の造成を条例で規制しているのは、広島市と東広島市、三原市の3市だけ。このため、県は土石流の恐れがあるエリアの上流部の盛り土を点検する計画だが、調査だけでも時間がかかると（県森林保全課の）が実情だ。

森脇教授は「住民も自宅周りの盛り土を、年一回くらいはチェックしてほしい。雨の降らない時季を選び、地域の清掃活動などを活用してもいい」とアドバイスする。

響を及ぼす山林に広く目を向けて、盛り土の様子を確かめたい。

山あいの盛り土について

も、森脇教授は「できれば現地を確認してほしい」と話す。残土処理の場合、土砂などを運んだ道路がある。谷の奥の道沿いに木々がなく、草地在が広がっている盛り土の可能性が高い。排水設備がない場合は自治体に相談する。

広島県内では、2009年7月に東広島市志和町の残土処分場で土砂崩れが起き、2人が死傷した。18年7月の西日本豪雨でも、坂町の広島県道路の盛り土が崩落。排水設備に土石流が詰まったのが原因だった。

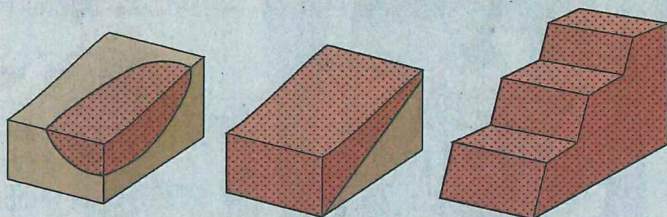
森脇教授は「身の回りの盛り土は安全かどうか。日頃からチェックしておく」と、災害時にどんな危険が及ぶのか想定しやすくする。いち早い避難などを守る行動につなげてほしい」と呼び掛けている。

盛り土のタイプ

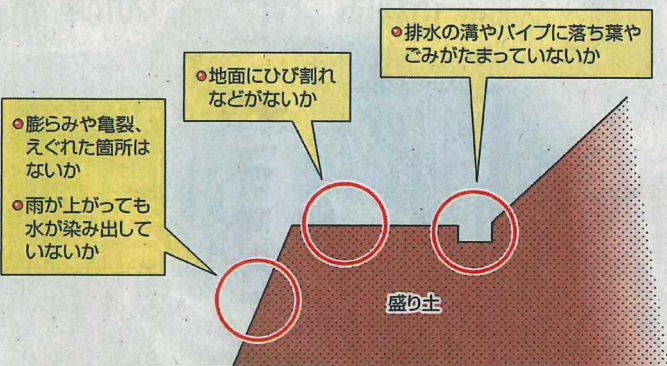
谷埋め型

腹付け型

残土処理



危険度のチェックポイント



危うい場所を見つけたら自治体に連絡しよう

※森脇教授への取材を基に作成

チェックポイント のり面の変形や排水溝

自分の住んでいる地域に影響

一方、残土処理などの盛り土が、熱海市のように住宅地と少し離れた真山にあることも。各自治体がHPで公表するハザードマップで、土砂災害の警戒区域などに指定されているエリアはとりわけ注意が必要。

自分の住んでいる地域に影響